

高齢者教育における生きがいの二極化

—小林文成の生きた教養論をとおして—

久保田 治 助

1. はじめに —研究の視点と先行研究—

高齢者教育において目標とされる学習課題に「生きがい」⁽¹⁾がある。今日においては、この生きがいは高齢者⁽²⁾に限定された言葉ではない。それは、今日の生涯学習体系化における教育実践においてもしかりである。1992年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」において、生きがいと生涯学習のかかわりが深く認識されてきている。この生きがいは何であるのかについて問うことは難しい。それは、多くの先行研究で論が展開されてきているにもかかわらず、生きがいは普遍的に述べることができない個の独自の性格であるとしているからである。その結果、高齢者教育研究には生きがい獲得のための実践を論じているものが多いといえる。

高齢者教育施策では、1971年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」において、はじめて高齢者教育のあり方が示されると同時に生きがいとの関係性も明示している。その内容は、「老人が孤独からどう解放され、老後の積極的な生きがいをどのように見出していくかが、重要な問題」となる。そこで、「高齢者自身による社会的適応の学習、精神的、情緒的な安定などその生き方についての教育的な施策を強力に進めることが大切である」とし、さらに「今後の高齢者教育は、高齢者自身が老年期にふさわしい社会的な能力を養い、できるだけ自立的な生活を続け、世代の隔絶の幅をせばめ、生きがいのある生涯を全うすることを主眼として行われるべきである」としている。

これに対し小林剛は高齢者の「生き方」を強調することが日本の生涯学習の特異性であると述べている⁽³⁾。ここでの生きがいは、高齢者教育実践の目的であり、高齢者の生活の質の追求である。しかし、小林健一は「生きがいの事実を記述しているにすぎない」と小林剛の生きがいの個別性に対し異論を唱えている。「望ましい状態や判断を導く基準と、その実現のためにとられるべき行動様式を追求する規範的な視点が欠如している」と指摘しているのである⁽⁴⁾。

以上のように生きがい論は二極化した論に行き着くと言える。ひとつは、個性的な自己として個に集約した「生きがい」と、もうひとつは社会において普遍的なものとして定義づけた「生きがい」のふたつに分化してしまうのである。

はじめに、このことについていまい少し述べれば、個性的な自己として個に集約した「生きがい」についての研究として、関家新助と池本美和子の論を挙げることができる。彼らは戦後の生涯学習体系

化における高齢者の学習の中で「高齢者の生きがいの特質は、生きがいそのものが特質を持つのではなく、「老い」の時期の固有性ゆえの特質と理解すべきである⁽⁵⁾」としている。彼らの述べる固有性とは、身体的、精神的諸機能の退行、社会的諸関係の希薄化である。ここで示されている生きがいは、その本質が個人の生の問題であるがゆえ、問題は複雑であり、生きがいそのものを明確にするに到っておらず、生きがいの生じる作用について述べているにとどまっている。

これに対し、社会において普遍的なものとして定義づけた「生きがい」についての研究として、小林健一の「生きがい」の事象への考察を挙げる。彼はJ.ロールズ⁽⁶⁾の『正義論』における「善」に注目し、生きがいを「人生を肯定したうえで、生きることによって価値を見だし、人生を生きぬくことによって獲得される精神状態である⁽⁷⁾」としている。そして、「そこには、過去をふり返って、生きていて善かったと感じる達成感が前提とされているだけでなく、その後の人生において生きることが善しとし、より善く生きられることへの期待感が存在している⁽⁸⁾」と導き出している。

生きがい論は二つの論に分化してしまっているのである。そして、しかしそのどちらもが、もう片方の「生きがい」について完全に否定しておらず、いまだ未消化のままである。自己にどこまでも集約してゆく生きがい論が普遍的に論じられないのである。反対に、主体と客体における生きがいの考察も、社会的規範の範疇から抜け出すのには限界がある。したがって、突き詰めるとそのために生きがい論は二極化に至り、その統合が図れないでいる。

これらの論に対して、小林文成（以下、文成）の「生きた教養」論は、これまでの「生きがい」の個性的な個に集約しつつも、それを主体と客体との関係性から普遍化させ、統合させているのと考えられる。ただし、それについては、これまで文成の先行研究が高齢者教育実践の先駆的位置にあるという紹介にとどまり、文成の高齢者教育論に迫る論文が殆どないこと、それとともに文成の生きがい論について考察している研究が見当たらないこと、の二点から文成の「生きた教養」論を基礎とし、彼の関わった事例を通して、二極化される「生きがい」について検討することが不可欠である。本論の目的は、文成の「生きた教養」論を基礎とし、彼の事例を通して、二極化される「生きがい」の統合について検討をすることである。

2. 生きた教養の概念

高齢者の学習目的として文成の生きがい観について考えなければならない。文成は生きがい獲得を認識するために必要な要素として「生きた教養」を取り上げている。彼はこの「教養」を教養主義における要素に加え「お互いに考えあう」ことであると述べている⁽⁹⁾。

高齢者にとって生きがいは、経験をとおしてそれぞれの生活の中に蓄積されていると彼は考えていた。それが多様な自己の諸問題であるがために、生きがいを常に自覚できず潜在化してしまっている。自覚するという状況は、明確に意識されず内在している状態にあるものの、生きがいとは本来誰もがもち得るものと考えていた。したがって、彼は生きがいを自覚し得ていない人々たちに「生きがい」学習実践を通して、目的とする今日の状況を批判し、それぞれの個が生きがいを自覚する方法を説い

ていた。その方法とは、高齢者が今まで生活にある「文化」という、受け継いできた慣習に潜んでいて、生活から導き出される「生きた教養」を媒介する。そして、生きがいを意識的に明確な状態にさせ、解決に導くというものであった。

はじめに、文成の考える「生きた教養」について明確にするため、文成自身の著述「老年期の生きがいと学習」の中で、引用されている東京新聞の記者とボーヴォワールの会話の一部分を以下に見ることにする。

フランス社会では、教養は少数特権階級の持ち物だということです。ごく少数グループが享受できるもので、いわゆる知的な探求に特別の関心をもつ人びとにかぎられているのです。しかし、これとは異なる教養もありうるのです。私が『教養』と呼ぶのは、世界との接触を広げるために役立つ学問であって、手を使う仕事でも教養はありうる。たとえば、職人は一種の教養を身につけていて、農民的な教養もあります。

農民たちが、大地のことを熟知していれば、かれはある種の教養を身につけたことになります。ところが、現代の文化は大部分の人びとにこの種の教養をあたえていないと思います。それというのは、仕事場で同じ動作、または、ほとんど同じ動作の繰り返しをはてしなくつづけている職人と労働者は、生きた教養をみにつけることはできないし、何冊かの文庫本を読んだからといって、将来、かれらの生活のたすけとなるものではありません。だから、私の考えでは、農民のほうが、都会生活者や労働者よりも、老いてから苦しむことが少ないといえます。というのは、かれから、その生涯に、植物や動物や大地と接触して、その教養を身につけることができたからなのです。それに、手を使う仕事は、若いときほどできなくとも、人生の終わりまで続けていけるからです。

これらのことを、私は『生きた教養』と呼びます。それは学校や書物でならなかった教養ではありません。もちろん、本のなかからえたものも『生きた教養』となりますが、それは専門の人びとに限られます。大多数の人びとは、そうではありません。だから多くの人びとは年をとると、自分を結びつけておく何物かを、なにももたないということになってしまうのです。⁽¹⁰⁾

これを文成は先述の高齢者が昔ながらの方法である自然栽培に目を輝かせ取り組もうとした出来事と対比させ、「この老人たちに、この「生きた教養」があったことにほかなりません。そのことへの自身と誇り。それが、時代の波によってすっかり色あせたかのように思いこんでいたのが、そうではないとわかったことの喜びです⁽¹¹⁾」と分析している。この発言には「実践を備えた、生きた教養」について、「退職して効果のある仕事のできなくなったことについて非常に苦しんでいる老人たちは、かれらの条件や能力に適応した教養をあたえられていたならば、もっとしあわせになれたであろう」と考えていたところに帰来する⁽¹²⁾。文成はボーヴォワールの“la culture vivante”「生きた教養」を日本に照らし合わせて、高齢者の生きがいについて言及していたのである。

この「生きた教養」論を唱える要因となった、ボーヴォワールの『古い』⁽¹³⁾について述べる。ボーヴォワールは社会的要素として高齢者を捉えているために、高齢者を弱者とみなしている。ボーヴォワールの古いの考察は様々な歴史的状況を詳細にしながらも、老いを明確するという結論に至って

ないことは、多くの先行研究の述べるところである⁽¹⁴⁾。老いを明確にすることは本来不可能なことであるのかもしれない。しかし、その核である老いという事象が不透明であったとしても、その周辺にある具体的事実から核である老いについて考察をしている。

ボーヴォワールはこの老いへの視座として、J.P.サルトルの考えを挙げている。彼女はサルトルの「老い」の概念⁽¹⁵⁾について“les irréalisables”「実感されえないもの」と述べている⁽¹⁶⁾。そして、この「実感されえないもの」を「私のすべての選択を限界づけ、それらの裏側を構成するところの、距てられた私の存在」であると解釈している。実感されえないものが無限であるのは、その状況の反映された側面であるからである。「他者」にとってそうであることを私たちは自分に対する様相において生きることはできない⁽¹⁷⁾。ボーヴォワールは、このサルトルの考えを参考に老いについて論を展開している。

ボーヴォワールは高齢者を「年取った人間は、自己の状況を内面的に把握し、それに反応する主体」と捉えるにもかかわらず、高齢期にある問題点として、「困難な点は、老いという問題については名目論的観点も概念論的観点もとることができないから（中略）この多様な経験を一つの概念^{コンセプト}のなかに、あるいは一つの観念^{ノーション}のなかにさえ、閉じこめることは不可能」であるとした⁽¹⁸⁾。

結果として、ボーヴォワールは高齢期にこの規範の中で、「高齢者は、習慣によって、他者たちのふるまいによって、さらには語彙そのものによって、それ（高齢者—引用者注）として指示される。彼（高齢者—引用者注）はこの現実を身に引き受けなければならない。その引き受け方は数多くある。しかれども、私が身に引き受ける現実と私とを一致させることを可能にしてはくれない。老いは私にとって一つの「彼岸」であり、私はそれについて十全な内的経験をもちつことができない。より一般的にいて、私の自我^{エゴ}は一つの超越的対象であって、私の意識のなかに住まず、距離をおいてのみ志向されうるものなのである⁽¹⁹⁾」と自己と客体関係にある「老い」について述べた。

このようにボーヴォワールの老いの論が、明確な定義とは言えないが、その外郭にある老いに関わる様々な事象について明示したのである。これを踏まえて、ボーヴォワールは「老い」の具現化された主体である「高齢者」が備える、生きがいを獲得する媒介としての生きた教養について、「教養が（中略）実践的で生きた教養であるならば、そしてこの教養によって個人が自己の環境への把握の手段を持ち、この把握をつうじて行う活動が年月の推移のあいだに成就し更新されてゆくならば、彼はあらゆる年齢において活動的〔現役〕で有用な市民でありつづける⁽²⁰⁾」と結論づけている。この彼女の考えから、文成は高齢者にとって「生きた教養」を身に付けることが、自身の生きがい獲得になると導き出している。

さらに、文成はこの「生きた教養」を明確化するために、秋山登美子の「現代における生きがいの状況」の論述を引用して生きがいについて考察を行っている。彼は、秋山の「今日の私的生活領域への関心の強さは、社会とのつながりをもつ『個人』が『私的原理』をもとにして外へひろがり、連帯を生み出す基盤を作り出すものではなく、家族集団の中に埋没して、社会への働きかけをしない、閉じた『私』を生み出しているように思われる。（中略）そこで、私的生活に徹することによって培わ^{つちか}

れた『私』の目で『公』を凝視し、批判することによって、閉じた『私』は開かれた『個人』への道を進むことができるのではないだろうか。そして、開かれた個人は、他者とのかかわりの中で、自己の存在を確認し、共有する価値をもつ共同体の中で、未来へのひろがりをもつものであろう⁽²¹⁾』と論じたものを受け、「ほんとうに自分の生きがいをつかまえようとするには、（中略）精神的努力をしなくてはならないのです。そして、（中略）自分のなかにひそんでいるかもしれない潜在的な能力をひき出し、発揮させていくことで、自分の人生により意味をもつものをさがしていく（中略）。ほんやり生きていくだけでは、生きがいもまたみつけることができない⁽²²⁾』と導いている。

文成は高齢者が生きがいを認識するということが、高齢者自身の生きた教養である「私生活に徹すること」によって培われた『私』の目で『公』である現代を凝視することであり、その結果、開かれた『個人』である自立した高齢者となり得るとしたのである。加えて、そのためには高齢者自身による精神的努力が不可欠であると考えていたと言える。この精神的努力とは、P.トゥルニエの唱える「第二の人生活動^{カリエール}」として自分自身をありのままに受け入れること、未完のまま受け入れることであり、それは「だれにでも存在するあのきわめて深い、存在の本質にふれた、力強い欲求、つまり、自分自身であろうとする欲求、あるいは自分自身と一致しようとする欲求⁽²³⁾」の中に見出される動機づけと親和的であると考えられる。

3. 小林文成の生きがい認識

文成は高齢者が充実した生活を送る方法を模索していた。その結果として到達した文成の考察は、充実した老後を送るには2つの方法があるというものである。ひとつには、「暦のうへの年齢にこだわらない人間になろうということ」、そして、「人間死ぬその日まで、学習するという気持ちをもとうということ」である⁽²⁴⁾。この根底にあったのはいかに「生きがい」を得るかである。高齢者の生きがいについて、文成は「老人が生きがいを感じて、楽しく生活できるためには、貢献欲求がみたされなくてはならない。貢献には、家族の人びとに何かで貢献するとか、社会的な貢献をすとかいろいろな仕方ができるだろう。そのなかで、老人が正しい信仰生活を送って、若い人びとの人生に対する指標を示すことができたなら、それは最高の貢献であり、老人自身の最大の生きがいだろうと思う⁽²⁵⁾』と述べている。これは、他者の視点が重要である神谷の論に近いものである。

以下に文成の関わってきた実践から「生きた教養」と言える事例を挙げ、そこから、生きがいの二極化について検討を行う。

はじめに、文成の設立した高齢者教育実践の場である楽生学園の創設当時の状況について述べる。楽生学園が始まった昭和30年代という時代は高度成長経済期であった。楽生学園があった長野県伊那市東春近という場所は以前から、「伊那の米どころ」といわれる純農村地帯で、代々米づくりで生計を立ててきた農家が大多数であった。文成は、この時代⁽²⁶⁾を「波は「強者」である大企業には有利に働きましたが、それに対する農村が「弱者」とされ、農村はひどい目にあいました」と述べ、「その農村のなかでも、いわゆる「弱者」である老人はいつそうみじめな状態におかれていた」と述

べている⁽²⁷⁾。特に、東春近地域では、「純農村であるこの地方も、そうした経済政策から逃れることができず、農業だけで生計を立てられる家はほとんどなくなってしまった」ために、「どの農家でも、長男の七～八割が伊那市の中心部へ勤めに出て、生活費の半ばを稼いで、あと半分を残された嫁や老人たちがやる農業でまかなう」状況であった。その中でも、高齢者は「五体がしっかりしているうちはまだ老人の役割もある、その点で、その老人たちはいいのですが、農業生産に耐えうる体力を失ってしまった老人たちは、それこそ淋しい思いをして」いたと、生きがいを獲得している高齢者が必ずしも多くなかった状況を指摘している⁽²⁸⁾。

このような状況において、文成の生きがいに関する認識は以下のような事例により深まっていった。その事例を特徴的であると考えられる箇所について検討する。

ある高齢者に文成が「近ごろの農業は、農薬や化学肥料にたよっているけれど、虫まで死んでしまいうクスリをまかれたのでは、土も生きてはられないのではないかね。野菜なんかは、やっぱり昔ながらの堆肥を使つての、自然栽培をしてほしいなあ」と言ったことに対して「そんなこと、簡単だ。わたたちが経験してきたことを生かせばいいんだからな」と返答したことに由来する⁽²⁹⁾。それは、「このことがかりに成功すれば、残留化学物質などの危険性を全く恐れず、しかも、おそらく香りと味覚の豊かな野菜が、その老人一家の食卓を色どることができるでしょう。そこで、若い人たちに農薬や化学肥料を使って栽培したものと食べくらべしてもらおうのです。結果は火をみるより明らかで、このときこそ、老人はグンと胸を張るときですし、また、それをきっかけにそうした自然栽培が食生活の改善にまで発展すれば、老人の経験があらたに生きることにもなるので、老人にとって、それはきっと「生きがい」になる⁽³⁰⁾」と考えていた。

この事例は生きがいをどうやって認識するかという具体例である。この中に、すでに、生きた教養の要素は含まれているのである。それは、高齢者の今までの生活において培われてきた経験である。先述でのボーヴォワールの経験における教養である「世界との接触を広げるために役立つ学問」をいかに認識させるかという課題を解消させているのである。ただ、この事例を挙げた当時である楽生学園創設時では文成の「生きた教養」観は明確ではなかった。

次に挙げる事例は「生きた教養」を認識した上で文成が検討している事例である。

87歳の高齢の女性の事例である。楽生学園創設から一回も欠かさず出席していたが、突然、脳卒中で倒れてしまい、動くのは左手と、脳機能がしっかりしているが、ほとんど全身の自由が失われてしまい、学園に行くことができずにいた。ある日、学園の友人が「脳卒中で倒れたのは不幸だけれど、しかたないわ。私たち老人は肉体的な老化にはどう逆らっても逆らいきれないこともあるんだから……。それより、あなたはまだ脳がしっかりしてるし、左手が自由なのは不幸中のさいわい。ひとつ、その手を使って何かおやんなさいよ」と励ました。その結果、彼女は熟考し若いころから身につけていた裁縫のことを思い出し、左手一本でも雑巾が縫えることに気付く。最初は上手いかなかったものの、練習の甲斐がありだんだん上手に縫えるようになっていった。それを毎年冬に、楽生学園において学習の合間に女性会員が雑巾を縫い、それを地元の小学校や保育所、老人ホームなどに届

ける作業を行っていたが、この共同作業に参加することができるようになったのである⁽³¹⁾。

この出来事について文成は「若いころからその身に「生きた教養」がついていたことがものをいったわけで、（中略）そうした、不自由な身体を使いながらの作業には、あらたな手の動かし方とか頭の使い方を必要としますから、それもまたKさん（前述の女性高齢の学習者—引用者注）にとっては新しい「生きた教養」への挑戦になったかもしれません⁽³²⁾」と結論づけている。

この事例も先術の事例と同じように「生きた教養」が、それぞれの生活のなかで得た経験を基に形成されていることが理解できる。ただ、先述の事例とは異なる点は、「生きた教養」という言葉の理解が得られているために、高齢者への学習のアプローチが明確になっていることである。

以上のように、文成の事例にみる「生きた教養」は、その手法としての理解は深まったといえる。そこで、本研究の目的である二極化にこの事例を照らし合わせ、個性的な自己として個に集約した「生きがい」と、社会において普遍的なものとして定義づけた「生きがい」を文成がどのように表現しているのかを探る。

文成はボーヴォワールの「生きた教養」を踏まえ、「充実した老後を迎えるためには、年齢や性別、職業、階層にとらわれることなく、その日々に「生きた教養」を求める生き方こそ必要⁽³³⁾」であると考察している。高齢者にとって実感を伴った幸福ではないこと、それは、彼の考える「生きた教養」が生活に伴わなくてはならないと考えていたことを意味する。この文成の考えから導き出される具体的な高齢者の姿を「老人が自分の生活を守るために、力を結集して、社会に向かって働きかけ」ることであるとし、「市町村議会や都道府県議会に直接かかわりあいをもっている。民意を代表するそういう議会に対して、年金制度を変えて、まず現在の老人からその生活を保障するよう、それぞれの市町村に、または都道府県に陳情請願運動を展開し、しかもそれを全市町村から押しあげて」行くことが必要であると述べている。加えて、「現在の老人には、ありがたいことに、このような特権が与えられているのである。このことを、自覚し、勇気をもって行動することが、老人問題を前進させるために必要と思われる。自分たちの生きる道を自分たちの力で、切りひらいて行く。若い世代にのみ頼ることをやめて、正々堂々、老人の人権を守る運動を展開する」ことが必要であると導き出している⁽³⁴⁾。

上記の文成の生きがいは二極化のどちらの考えも取り入れていると言える。それは、高齢者が自分の生活を守るために、力を結集して、社会に向かって働きかけることに集約されると考えられる。自己の生活を守ることは、単に生活保障を意味するのではなく、自己のこれまでの経験を表現できる場を確保することである。個人の本来備わっていた「生きた教養」によって自己を豊かにする。そこで明確になった「教養」を持つ自己は、日々に「生きた教養」を求める生き方へと変化する。これは社会に向けられ、高齢者の人権要求という形で普遍化された高齢者の生きがいとして昇華されて行くのである。

これを、文成は現代における高齢者の理想的なあり方として「現代人となる学習⁽³⁵⁾」と称している。今日の高齢者における生きがいの認識とは、「生きた教養」を獲得しているという「自信と誇り。

それが、時代の波によってすっかり色あせたかのように思いこんでいたのが、そうではないとわかったことの喜び⁽³⁶⁾」に気づかせることであると、文成は考えていたのである。

4. おわりに

以上のように、文成の「生きた教養」論を基礎とし、彼の関わった事例を通して、高齢者教育における二極化される「生きがい」の統合について検討してきた。高齢者が自分自身をありのままに受け入れること、未完のまま受け入れることを前提とした上で、教養が実践的で生きた教養であるならば、彼はあらゆる年齢において現役であり続けると文成は考えていた。その実践として、楽生学園に関わる高齢者の主体的な活動そのものが教育的であることを彼は実感したのである。この高齢者の生きがいは二極化論のどちらか一方で語ることはできない。それは、文成が「地域の老人が全員参加するものでなければならぬ」とし、「老人はみなしあわせにならなくてはならないし、そのための学習と活動する」ものと考えていたからである⁽³⁷⁾。

ここにおける「すべての高齢者」を対象として定義しているところに高齢者の生きがい獲得論を考察していく鍵があるのではないかと考えられる。本論で述べたように、生きがいが個人の問題へと傾斜してしまうために、生きがい自体を考察することが不可能であるとしている先行研究が多い。これに対して、文成は一般論にありがちであるにもかかわらずあえて「すべての高齢者」という語を用いている。それは、一方では自己に集約していく生きがい獲得の追及と同時に、他方では高齢者という存在が社会構造にみる弱者としての高齢者である「それ」ではない、一個人である他者として、同じ価値ある存在と認識する試みを行ったと考えられる。

さらに、彼は高齢者教育が成人教育と区別しなければならない理由として、「現代人となる学習のほかに、老人福祉の獲得というか、老人福祉をみずからの手で築きあげていくもの⁽³⁸⁾」であることを挙げている。これは、文成が成人でありながら、戦後の青年教育、婦人教育の対象から除外された高齢者の立ち遅れた民主化である「現代人となる学習」の必要性と同時に、高齢者特有の問題により、高齢期の社会教育が福祉的概念を内在させなければならないことを意味する。高齢者福祉の観点からすると、「すべての高齢者」が老後を創造する主体者として取り扱われなければならない。したがって、この点においても、「すべての高齢者」の学習の必要性を上記の活動の中から見出していたと考えられる。

これらの高齢者の学習に二極化してしまう生きがいを統合する上で、不可欠な要素が「生きた教養」なのである。個に集約して生きがいを模索した上で生まれる、これまでに培われてきた「生きた教養」は社会へと目を向けることによって、高齢者の人権として普遍的な高齢者の幸福を求める思考へと変化させるのである。このようにして文成は「個」から「公」への変容として二極化される生きがいを統合させたのである。

注(1) 生きがい研究として代表されるものに神谷美恵子の生きがい論が挙げられる。この論における生きがいは高齢者に限定したものではなく、また、社会教育の観点からの考察ではない。しかし、高齢者教育において生きがいについて考察をするとき、神谷の論を機軸としている研究がその大半を占める。神谷は著書『生きがいについて』の中で「生きがいへの探求が単なる社会的適応と、安定を志向するものならば、ある集団の中でその習俗や道徳に適した生活様式をいとなみ、対人関係もうまくいかなければ、それだけで生きがい感が生れるはずである。ところが、事実は必ずしもそうではない(中略)生きがいへの欲求というのは、単なる社会的存在としての人間の欲求ではなく、個性的な自我の欲求」(神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980年、p. 52)であると述べている。同様に、V. E. フランクルも生きがいを考察する上で欠かせない人物で、どんな時にも人生には意味があり、逆境や絶望的な状況でも人生を意味あるものにする可能性は存続すると述べている(ヴィクトール・フランクル 諸富祥美股監訳『<生きる意味>を求めて』春秋社、1999年参照)。

そもそも、「生きがい」とは日本固有の観念である。神谷は「日本人の心の生活の中で、生きる目的や意味や価値が問題にされてきたことを示すものであろう。たとえそれがあまり深い反省や思惟をこめて用いられてきたのではないにせよ、日本人がただ漠然と生の流れに流されてきたのではないと言うことがうかがえる」(『生きがいについて』前掲、p. 14)と述べている。また、小林司は「『生きがい』という単語は外国語にはないが、しいてこれを訳せば「生きることに値すること」「生きる価値」「意味ある存在理由」」(小林司『生きがいとは何か』NHKブックス、1989年、p. 23)であると述べている。「生きがい」は「生き甲斐」である。「甲斐」とは「替える」ことを意味し、何かをすることによって得られる充実感である。本来は日本特有である生きがいを考察するにあたり、「生きがい」に関わる歴史的背景について検討すべきである。本論ではこれまでの「生き甲斐」から変容した「生きがい」とし、これを高齢者の学習目的に迫る要素と考えたい。

(2) 小林文成は自身の著書の中で「老人」という言葉を使用している。「老人」と「高齢者」の語による解釈の違いを十分に検討することが賢明であるが、本論では「高齢者」という語を使用する。その理由として、今回、土井健司「共在的主体性の回復にむけて」(『現代思想』2002年6月号、青土社、pp. 222-223)において述べた「老人」と「高齢者」のそれぞれの持つ語義の違いについての論を参考にしている。以下に記載する。

(戦後、近代化によって一引用者注)「高齢者」という言葉は、「老」という言葉の持っていた価値や意味を払拭し、老人を単なる「歳をとった人」という無色なものに変えてしまうからである。こうして年齢の大小とは別に、若者や壮年と同じ価値観で老人を見ることが生じる。つまり、高齢者というのは歳をとっているだけで、根本においては、若者や壮年と変わるものではない。質の違いだけではなく、単なる量の違いであり、本質的には同じなのである。こうした見方は、第一には「高齢者」と言われる人々自身の意識、願望であろう。自分は人より余計に歳をとっているだけで、多少肉体は衰えても、根本において何も変わるものではない。従来「老」当為言葉が有していた意味内容の変更、否定と言うべきであろう。なぜなら「老」という言葉は、青年や壮年とは根本的に異なる別の領域を意味するものであったからである。人は老境に入ること、それまでとは別の生の領域に入る。還暦の祝などはそうしたイニシエーションであった。老境に至ると隠居として分別を持った。欲望とは無縁のひっそりとした生き方が求められる。(ジョルジュ・ミノワ著『老いの歴史』の中で一引用者注)ミノワは指摘する。「老人にふさわしいとされるたった一つの役割は、きわめて非人間的である。つまり完璧で、誤りのない、そして弱みもない賢者としてのそれなのだ」。このようなことから、例えば「老人」の性は嫌悪感の対象となる。(中略)「老人」が「高齢者」と言い換えられる背景には、このような考えもあるように思う。単に多く歳を重ねているだけという意識は、自らの力の衰退を受容したくないという意識の表現となる。また力の減退を意識しない人はたいてい自らの老いを意識しない。同時に老人を老いの内に安住させない傾向も生まれる。

文成の論において「老人」、「高齢者」の語意は、それぞれの特に区別をして書かれていない。というのは、文成の初期の著書において「老人」を多く使用したことは時代的に「高齢者」という語が汎用していなかったためであると考えられる。ただ、そのどちらの語にも、当初から現代社会の適応を目的とした高齢者像を想定していると考えられる。

- (3) 小林剛「高齢者の生涯学習」(『シルバー・データブック』サンケイ新聞データシステム, 1992年, p. 120 参照)。
- (4) 小林建一「『生きがい』と生涯学習の規範理論」(『日本社会教育学会紀要』No36, 2000年, p. 48)。
- (5) 関家新助・池本美和子「生きがいの構造」(『高齢者の生きがい・社会参加の考え方と課題』日本社会事業大学, 1993年, p. 22)。
- (6) ジョン・ロールズ 矢島鈞次監訳『正義論』紀伊国屋書店, 1979年参照。
- (7) 「『生きがい』と生涯学習の規範理論」(前掲, p. 50)。
- (8) 同前。
- (9) 小林文成『老人クラブに生きる』老人福祉双書, 1970年, p. 112。
- (10) 小林文成「老年期の生きがいと学習」(小林文成・松島松翠・東畑朝子『老年期の生きがい』家の光協会, 1977年, pp. 24-25)。
- (11) 同前, p. 25。
- (12) 同前, p. 23。
- (13) Simone de Beauvoir, "La Vieillesse", Paris: Gallimard, 1970. (邦訳, 朝吹三吉訳『老い』人文書院, 1972年)。
- (14) 上野千鶴子・春日キスヨ・市野川容孝「介護の社会化」(『現代思想』2002年6月号, 青土社, p. 85)。
- (15) Jean-Paul Sartre, "L'être et le néant", Paris: Gallimard, 1943. (邦訳, 松浪信三郎『存在と無』人文書院, 1943年参照)。
- (16) Beauvoir, op. cit., p. 309. (邦訳, 『老い』前掲, p. 342)。
- (17) Ibid., p. 309. (同前, pp. 342-343)。
- (18) Ibid., p. 299. (同前, p. 331)。
- (19) Ibid., p. 309. (同前, p. 343)。
- (20) Ibid., p. 569. (同前, p. 639)。
- (21) 「老年期の生きがいと学習」(前掲, pp. 42-43)。
- (22) 同前, p. 43。
- (23) ポール・トゥルニエ 山村嘉己訳, 『老いの意味』ヨルダン社, 1975年, pp. 307-308。
- (24) 「老年期の生きがいと学習」(前掲, p. 40)。
- (25) 小林文成『宗教と人生』ドメス出版, 1980年, p. 126。
- (26) 戦前は養蚕業を支えとした製糸業, または, 木材製品工業の展開がわずかにみられるが, その大多数が農業中心で, 代々米づくりで生計を立ててきた。しかし, 第2次世界大戦中の疎開工場の定着とともに, 次第に工業生産が発展し, 特に, 1956年以降の神武景気・岩戸景気と呼ばれた設備投資ブームの影響下に, 電気通信機器製造業・精密機械器具製造業などの近代産業が, 伊那市に急激に発展し, 地域の産業構造は農業中心から工業中心へと, 大きく変化していた。
(伊那市教育委員会 伊那市青年実態調査委員会『伊那にはたらく青年たち』伊那市教育委員会 伊那市青年実態調査委員会, 1964年, p. 4 参照)
- (27) 「老年期の生きがいと学習」(前掲, p. 21)。
- (28) 同前, pp. 20-21。
- (29) 同前, p. 22。
- (30) 同前, pp. 22-23。
- (31) 同前, pp. 25-27。
- (32) 同前, p. 27。
- (33) 同前, p. 30。
- (34) 小林文成『福寿草』日常出版, 1974年, p. 76。
- (35) 小林文成『老人は変わる』国土社, 1974年, p. 215。

-
- (36) 「老年期の生きがいと学習」(前掲, p. 25)。
(37) 『老人は変わる』前掲, pp. 214-215。
(38) 同前, p. 215。